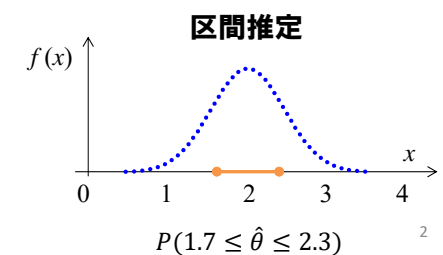
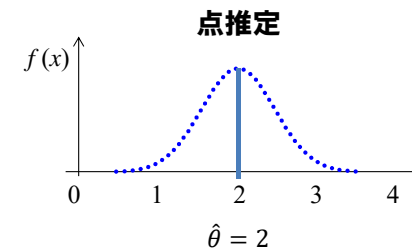


# 推定

- 標本から母集団の分布のパラメータ(母数)を求める
  - 点推定 未知のパラメータ  $\theta$  を1点で推定
  - 区間推定 未知のパラメータ  $\theta$  が存在する区間を推定
- データ(標本の実現値)を利用して未知  $\theta$  の値を推定
  - 例 データ  $\{2, 3, 1, 2, 3, 4, \dots, 2\}$  から母集団の母平均を推定



1

2

## 統計学入門 補助資料 ～正規母集団の区間推定～

2022年度1学期: 月曜2限  
担当教員: 石垣 司

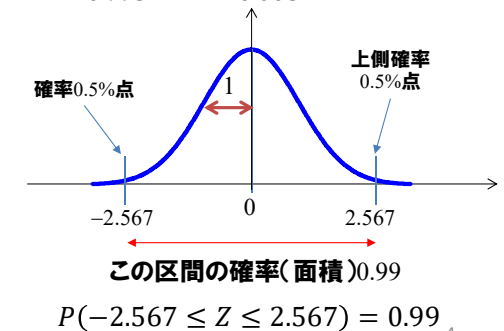
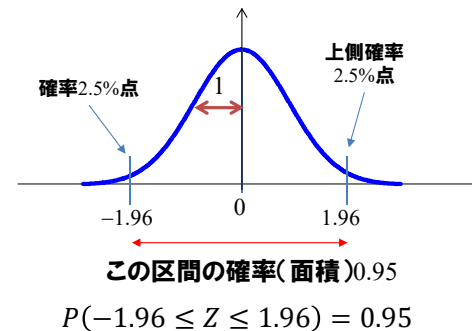
### 正規母集団の区間推定

- 正規母集団の母平均・母分散を区間推定
  - 正規母集団以外の母集団は,  $n$  が大きい場合, 標本平均を中心極限定理で正規分布に近似できる
  - 信頼区間による推定
- 講義内容の整理(正規母集団に限定)
  - ①母分散が既知の場合の母平均の区間推定
  - ②母分散が未知の場合の母平均の区間推定
    - $t$  分布、カイ2乗分布
  - ③ 正規母集団の母分散の区間推定

3

### (復習) 標準正規分布の上側確率点と信頼区間

- $Z_{\alpha}$  標準正規分布の上側確率  $100 \times \alpha\%$  点
  - 97.5%点(上側確率2.5%点)  $Z_{0.025} = 1.96$
  - 2.5%点  $Z_{0.975} = -Z_{0.025} = -1.96$
  - 99.5%点(上側確率0.5%点)  $Z_{0.005} = 2.567$
  - 0.5%点  $Z_{0.995} = -Z_{0.005} = -2.567$



4

## ①正規母集団の母平均の区間推定(母分散既知)

### • 例 母平均 $\mu$ の95%信頼区間(復習)

– 標準化した標本平均  $\bar{Z} = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}$

$$P(-1.96 \leq \bar{Z} \leq 1.96) = 0.95$$
$$P\left(\bar{X} - 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}} \leq \mu \leq \bar{X} + 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right) = 0.95$$

–  $\sigma$  の値は既知なので信頼区間は計算可能

• しかし、多くの実データの分析において、平均が未知で分散が既知という状況は考えにくい

5

## ②正規母集団の母平均の区間推定(母分散未知)

• “母分散  $\sigma^2$  は既知”の条件は現実的ではない  
⇒ 母分散  $\sigma^2$  を標本分散  $S^2$  で代用

### • $t$ 統計量

–  $\bar{Z}$  中の  $\sigma$  を  $S$  で代用した統計量  $T$

$$\bar{Z} = \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \rightarrow T = \frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}}$$

–  $T$  の分布は標準正規分布ではない

– 大標本 (サンプルサイズ  $n$  が  $n \geq 30$  くらい)  
⇒ 中心極限定理より  $T$  を標準正規分布で近似

– 小標本 ( $n < 30$  くらい) ⇒  $t$  分布

6

## 小標本の区間推定に必要な確率分布

### • Student の $t$ 分布 (1908)

–  $t$  統計量の従う確率分布

– ビールの品質管理から誕生

- 醸造器内の酵母数を標本抽出し顕微鏡で数えて厳密管理
- 当初は  $\sigma^2 = S^2$  としてビール品質の監視
- しかし、小標本のとき、 $S^2$  の値がおかしいと気付く
- $\bar{X}$  の信頼性評価に正規分布 (with  $\sigma = s/\sqrt{n}$ ) は不適の疑念をもつ

– ⇒ 小標本のときの  $S^2$  の正しい見積もりが必要

### • カイ2乗分布 $\chi^2_{(n)}$

– 標本分散  $S^2$  に関連する確率分布



William Sealy Gosset  
1876-1937  
ギネスビール社員  
“Student” はペンネーム

7

## $\chi^2$ 分布

### • 自由度 $n$ のカイ2乗分布 $\chi^2_{(n)}$

– 確率変数  $Z_i \sim i.i.d. N(0,1)$  の2乗和  $\chi^2$  の従う分布

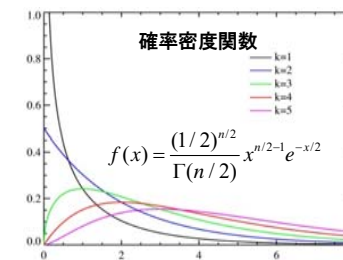
$$\chi^2 = Z_1^2 + \dots + Z_n^2$$

– パラメータ 自由度  $n$  (サンプルサイズ  $n$  に対応)

– 平均と分散  $E[\chi^2] = n, V[\chi^2] = 2n$

– 再生性をもつ

- $X_i \sim \chi^2_{(n)}$  (自由度  $n$  の  $\chi^2$  分布)
- $Y_i \sim \chi^2_{(m)}$  (自由度  $m$  の  $\chi^2$  分布)
- $X_i + Y_i \sim \chi^2_{(n+m)}$



8

## t 分布と $\chi^2$ 分布の関係

- t 統計量は,  $\bar{Z}$  と  $\chi^2$  分布に従う確率変数の比
  - 標本  $X_i \sim i.i.d.N(\mu, \sigma^2)$  のとき  $U$  は自由度  $n-1$  の  $\chi^2$  分布に従う

$$U = (n-1) \frac{S^2}{\sigma^2}$$

- t 統計量

$$T = \frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}} = \frac{\bar{Z}}{\sqrt{U/(n-1)}} \quad \begin{array}{l} \leftarrow \text{標準正規分布} \\ \leftarrow \text{自由度 } n-1 \text{ の } \chi^2 \text{ 分布} \end{array}$$

- 標準正規分布に従う確率変数と  $\chi^2$  分布に従う確率変数の比
- 両者の密度関数の比から t 統計量の密度関数を生成

- t 統計量に従う分布を自由度  $n-1$  の t 分布とよぶ

$U \sim \chi^2_{(n)}$  の証明は煩雑なため省略。興味のある人は、「高杉&馬場, 演習統計学キャンパス・ゼミ, マセマ出版社」の p.168 などを参照<sup>9</sup>

## t 分布

- 自由度  $n$  の t 分布

- $Z \sim N(0,1), W \sim \chi^2_{(n)}$ ,  $Z$  と  $W$  は独立のとき,  $t$  が従う分布

$$t = \frac{Z}{\sqrt{W/n}}$$

- パラメータ 自由度  $n$

- 平均と分散

$$E[t] = 0, V[t] = \frac{n}{n-2} \quad (n > 2)$$

- $n = 1$  のときコーシー分布

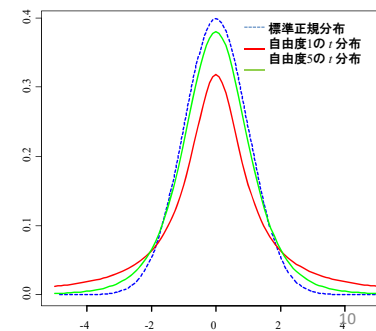
- 原点に対象

- 自由度  $n$  が大きい時 ( $n > 30$  くらい) 正規分布にほとんど一致

- $n \rightarrow \infty$  の時, 正規分布

確率密度関数

$$f(x) = \frac{\Gamma((n+1)/2)}{\sqrt{n\pi}\Gamma(n/2)} (1+x^2/n)^{-(n+1)/2}$$



## ② 正規母集団の母平均の区間推定 (母分散未知)

- $t_{\alpha}^{(n-1)}$ : 自由度  $n-1$  の t 分布の上側確率  $100 \times \alpha\%$  点

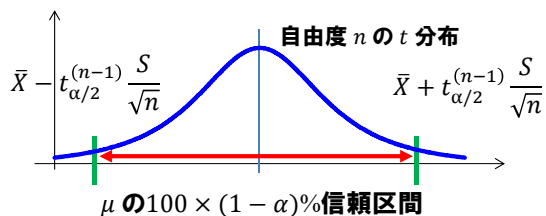
- 例: 自由度  $n-1$  の t 分布の上側 5% 点  $t_{0.05}^{(n-1)}$

- t 分布は対称  $t_{\alpha}^{(n-1)} = -t_{1-\alpha}^{(n-1)}$

- $100 \times (1-\alpha)\%$  信頼区間の計算には  $t_{\alpha/2}^{(n-1)}$  を使用

$$P\left(-t_{\alpha/2}^{(n-1)} \leq T \leq t_{\alpha/2}^{(n-1)}\right) = P\left(\bar{X} - t_{\alpha/2}^{(n-1)} \frac{S}{\sqrt{n}} \leq \mu \leq \bar{X} + t_{\alpha/2}^{(n-1)} \frac{S}{\sqrt{n}}\right)$$

- 例 95% 信頼区間の場合  $\alpha = 0.05, 100 \times (1-\alpha) = 95, t_{\alpha/2}^{(n-1)} = t_{0.025}^{(n-1)}$

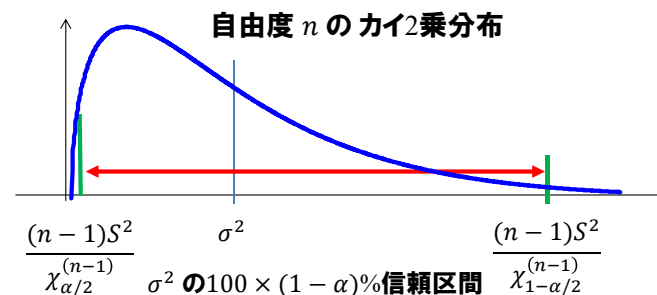


## ③ 正規母集団の分散の区間推定

- $U = (n-1) \frac{S^2}{\sigma^2} \sim \chi^2_{(n-1)}$

- $\chi_{\alpha}^{(n-1)}$ : 自由度  $n-1$  の  $\chi^2$  分布の上側  $100 \times \alpha\%$  点

$$P\left(\chi_{1-\alpha/2}^{(n-1)} \leq U \leq \chi_{\alpha/2}^{(n-1)}\right) = P\left(\frac{(n-1)S^2}{\chi_{\alpha/2}^{(n-1)}} \leq \sigma^2 \leq \frac{(n-1)S^2}{\chi_{1-\alpha/2}^{(n-1)}}\right)$$



## 演習問題

- 東証株価指数(TOPIX)の日次収益率は正規分布に従うと仮定する  
 $t_{0.025}^{(3)} = 3.18, t_{0.025}^{(4)} = 2.78, t_{0.05}^{(3)} = 2.35, t_{0.05}^{(4)} = 2.13, Z_{0.025} = 1.96,$   
 $Z_{0.05} = 1.65, \chi_{0.025}^{(3)} = 9.35, \chi_{0.025}^{(4)} = 11.14, \chi_{0.05}^{(3)} = 7.18, \chi_{0.05}^{(4)} = 9.49,$   
 $\chi_{0.975}^{(3)} = 0.22, \chi_{0.975}^{(4)} = 0.48, \chi_{0.95}^{(3)} = 0.35, \chi_{0.95}^{(4)} = 0.71$
- 直近の4日間の日次収益率は  $\bar{X} = 0, S^2 = 1$  であった。母平均  $\mu$  の95%信頼区間を求めなさい
  - このとき、母分散  $\sigma^2$  の95%信頼区間を求めなさい
  - 約1年間(256日)の日次収益率は  $\bar{X} = 0, S^2 = 1$  であった。母平均  $\mu$  の95%信頼区間を求めなさい

## 演習問題

- 東証株価指数(TOPIX)の日次収益率は正規分布に従うと仮定する  
 $t_{0.025}^{(8)} = 2.31, t_{0.025}^{(9)} = 2.26, t_{0.01}^{(8)} = 2.90, t_{0.01}^{(9)} = 2.82, t_{0.005}^{(8)} = 3.36,$   
 $t_{0.005}^{(9)} = 3.25, \chi_{0.01}^{(8)} = 20.09, \chi_{0.01}^{(9)} = 21.67, \chi_{0.005}^{(8)} = 21.96,$   
 $\chi_{0.005}^{(9)} = 23.59, \chi_{0.99}^{(8)} = 1.65, \chi_{0.99}^{(9)} = 2.09, \chi_{0.995}^{(8)} = 1.34, \chi_{0.995}^{(9)} = 1.74$
- 直近の9日間の日次収益率は  $\bar{X} = 0, S^2 = 1$  であった。母平均  $\mu$  の99%信頼区間を求めなさい
  - このとき、母分散  $\sigma^2$  の99%信頼区間を求めなさい